異文化コミュニケーション学科

海外留学の事後研修を開催

――3年次生が現地での体験語る

留学先の言語で半年間の体験を報告する学生

国際コミュニケーション学部異文化コミュニケーション学科は半期の海外研修留学を必須としている。今年度前期、初めての研修留学を終えた3年次生による報告会を兼ねた事後研修が9月14、15日、神田キャンパスで開かれた。

1期生にあたる3年次生は、この春から北米、欧州、アジアなど10カ国・地域に留学（オンラインを含む）。語学力を鍛えると同時に、異文化理解を深めてきた。

14日は、英語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、中国語、コリア語のクラスに分かれ、留学先の言語で個人発表を行った。学生たちはそれぞれ、ホストファミリーや留学先の大学のクラスメートとの思い出、休日の過ごし方、日本との文化の違いなどについて、写真などを交えながら報告した。カナダのビクトリア大学に留学した学生は「実り多い時間だった。引き続き英語力を磨き、別の国にも行ってみたい」と振り返った。

1、2年次生を交えてのグループディスカッション

15日は、これから海外研修留学に臨む1、2年次生も事前研修として参加し、ディスカッションを実施。フランス語のクラスでは、「自国について聞かれることが多いので、日本の文化や政治、言語について説明できるように準備しておいた方がよい」とアドバイスした。スペイン語のクラスでは、1～3年次生混成で、現地での学び、治安、物価、交通事情などについて自由に意見を交わしていた。

異文化コミュニケーション学科 初のワークショップ

プロの指導で「作劇」体験

プロの俳優とともに作品を作り上げた

演劇体験をテーマとした国際コミュニケーション学部異文化コミュニケーション学科主催のワークショップが、8月22日から25日までの4日間、神田キャンパスで行われた。公益財団法人静岡県舞台芸術センター（SPAC）の牧山祐大さんが講師を務め、俳優2人も参加。学生たちはセリフや演技の指導を受けながら、プロの俳優とともに約20分間の作品を作り上げた。

この企画は、演劇を自分の体と声を使ったコミュニケーション手法と捉え、その基礎を学ぶことを目的とした同学科初のワークショップで、1～3年次生計6人と教員が参加した。牧山さんが脚本を書いた太宰治の『グッド・バイ』を取り上げ、学生たちは台本の読み合わせから、立ち稽古、本番までの演劇を作る一連の過程を体験した。

参加した学生、教員、SPACのメンバー（最終日）

高校で演劇部に所属していた真庭遥さん（3年次）は「プロの俳優の演技は迫力があり、学ぶことが多かった。演劇への興味が強くなった」と話した。佐藤諒弥さん（2年次）は「ちょっとした動きにも意味があり、細部にまでこだわって作品を作っていることを知ることができた」と振り返った。

指導した牧山さんは「ワークショップでここまで芝居を教えることはない。『作劇』を体験してもらうことが目的だったが、皆さんの新しいことに挑戦しようという気持ちに応えることで、楽しさ以上のことを伝えることができた」と語った。

公開講座情報

政策科学シンポジウム
「カーボンニュートラルと産業・地域・大学」
▽日時＝10月30日（日）14時30分～17時30分
▽開催方法＝対面（先着50人）とオンライン（Zoom）
▽場所＝神田キャンパス731教室
▽基調講演＝橘川武郎氏（国際大学副学長）
▽受講料＝無料
▽要申し込み（QRコード参照）
問大学院事務課（神田）
TEL03・3265・6568

知の発信

科研費採択研究から

国際コミュニケーション学部准教授　小林　貴徳

メキシコ先住民の知恵を防災に生かす

メキシコは日本と同様、災害の多い国です。しかし、先住民の居住地域では災害への備えと対応、災害復旧から生活再建にいたるまで十分な対策が取られているとは言えません。今回、研究対象とするゲレロ山岳部はメキシコ南東部に位置し、先住民が多く居住しています。近年、集中豪雨や熱帯低気圧の被害が頻繁に起きていますが、復旧は都市部よりはるかに遅れています。今回の研究では、先住民コミュニティに継承される生活の知恵（民俗知）を知的資源として活用し、しなやかな防災力（災害レジリエンス）を創出していきます。

ゲレロ山岳部は、私の研究活動の原点の地です。学生時代、メキシコ滞在中、ふらりと立ち寄った語学学校の経営者がゲレロ山岳部出身の先住民だったことから、彼らの母社会の人々との関わりが生まれました。貧困や差別といった社会的排除が国内で最も深刻な地域であり、研究を通じて、地域や社会の課題を明らかにし、それらの改善に役立ちたい。私は防災の専門家ではありませんが、だからこそ、地域の人々と一緒に考え、そこに根ざした提案ができると信じています。

メキシコでも防災教育は進んでいますが、先住民の暮らしが考慮されていません。もう一歩踏み込んで、コミュニティに応じた呼びかけが必要です。日本でも災害にまつわる伝承が各地にありますが、今回改めてゲレロ山岳部で伝承や説話について調査を行います。伝承には過去の災害の教訓が含まれることがよくあります。それらを資源として再評価するとともに、先住民コミュニティの社会的文化的な特性に合わせた形に調律（カルチュラル・チューニング）して、実質的な防災教育に導入していく予定です。

2020年に開設された国際コミュニケーション学部異文化コミュニケーション学科では、スペイン語の授業や「資源としての文化」の講義などを担当しています。1期生である3年次生の海外留学を経て、今年度後期からは異文化理解のための学びがさらに深みを増します。学生たちのパッション（情熱）がどのように開花するのか、私も楽しみにしています。

（こばやし・たかのり）神戸市外国語大学大学院外国語学研究科博士課程単位取得満期退学。専門は文化人類学、民族学。著書に『メソアメリカ文明ゼミナール』（共著）など。